

安政大地震と倉敷

～江戸時代の南海トラフ地震～

はじめに

1 安政大地震の概要 ※日付は旧暦

安政大地震は嘉永7年(1854)11月4日、午前8時頃に発生した安政東海地震と、その翌日午後4時頃に起きた安政南海地震の総称。11月27日に嘉永は安政と改元されたので安政地震と呼ばれている。駿河湾から四国沖の沿岸部には連続した3つの震源域があり、マグニチュード8以上の海溝型地震を周期的に発生させている。これが東海地震・東南海地震・南海地震で3つの地震には連動性があり過去の歴史において同時、もしくは連続して巨大地震(南海トラフ地震)を発生させてきた。土佐沖を震源とする安政南海地震は東海地震の32時間後に発生しており、マグニチュード8.4、全国推計死者3万人、全壊家屋2万戸、半壊4万戸、津波流出1万5000戸の巨大地震であった(被害状況の数字は資料によって相違があるがここでは『岡山県南部における南海地震の記録』の数字をあげた)

【『岡山県南部における南海地震の記録－昭和南海地震・安政南海地震－』岡山県備前県民局、2007年。気象庁ホームページ参照】

(1) 南海トラフ地震とは？

- ・南海トラフは駿河湾から日向灘沖にかけての海底の溝状の地形
 - ▶ トラフ(舟状海盆)は海溝より浅くて幅が広い
- ・南海トラフ沿いで発生する地震が南海トラフ地震と呼ばれる
- ・陸側のプレート(地球の表面を覆う固い岩の層)が海側のプレートの引きずり込みに耐えられなくなり跳ね上がることで地震が発生する
- ・過去1400年間を見ると約100～200年間隔で津波を伴う大規模地震を発生させてきた

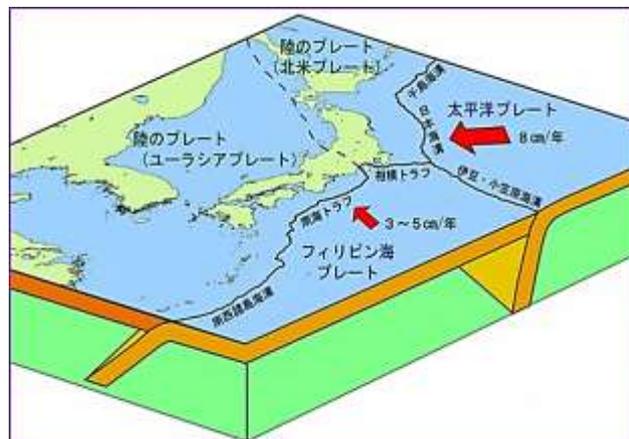


図1 日本付近のプレートの模式図
(気象庁ホームページより転載)

表1 南海トラフで過去に発生した巨大地震

発生年	地震	主な記録	前回との間隔(年)
684	白鳳地震	『日本書紀』	
887	仁和地震	『日本三代実録』『扶桑略記』	203
1096	永長東海地震	『後二条関白師通記』『中右記』	209
1099	康和南海地震	『後二条関白師通記』『時範記』	212
1361	康安(正平)東海地震	『後愚昧記』	265
	康安(正平)南海地震	『後深心院関白記』	262
1498	明応地震	『後法興院記』『言国卿記』『和長卿記』	137
1605	慶長地震	『言経卿記』『時慶卿記』	107
1707	宝永地震	『基熙公記』『兼香公記』ほか多数	102
1854	安政東海地震	『二條家内々御番所日次記』『脇坂安宅日記』 『大家祐吉日記』ほか多数	147
	安政南海地震		
1944	昭和東南海地震	多数のため省略	90
1946	昭和南海地震		92

註 1 『大日本地震史料』『増訂大日本地震史料』等より作成

2 発生年は白鳳地震から明応地震まではユリウス暦

3 史料が多数ある地震については一部を取り上げた

※地震史料は国立国会図書館東日本大震災アーカイブ(ひなぎく)の地震年表から閲覧できます

※ひなぎくトップページURL <https://kn.ndl.go.jp/>

(2)過去の南海トラフ地震 ⇨ 表1

・史料に見る南海トラフ地震の特徴

- ① 京都や奈良での強い揺れ
- ② 太平洋沿岸での津波、地殻変動
- ③ 温泉の湧出停止

・文献の他にも絵図や近年の地質学会の津波堆積物調査などからも研究が進められている

2 倉敷市域における安政南海地震の史料

(1) 史料から分かる被害状況 ⇨ 表2・参考史料(意識文)

史料1 「嘉永七年御用書類留」(大橋紀寛家文書Ⅱ-1-A-12) 表2-1

在方町・倉敷村の被害状況。揺れは大きかったが被害はほとんどなかった
人々は家を出て仮小屋に移ったり、野宿をしたりして避難

表2 倉敷市域における安政南海地震の記録がある史料

No	史料	内容
1	「嘉永七年御用書類留」(大橋紀寛家文書Ⅱ-1-A-12)	大橋紀寛家文書は窪屋郡倉敷村の庄屋や倉敷代官所管下幕府領の掛屋などを勤めた豪農商大橋家に遺された資料です。御用留は代官所からの達や村人の訴状などの御用書類を写し置いた役用の帳面です。この記録は倉敷村の年寄(村役人)の光右衛門が書き置いた嘉永7年11月5日夜の地震の様子を写したもので、倉敷村では大きな被害はなかったものの、町民は家屋倒壊に備えて家を出、仮小屋や野宿で夜を明かしたことが分かります
2	「日記」 (玉島米屋三宅正堂家文書 35-19-A-5)	浅口郡阿賀崎新田村(倉敷市玉島阿賀崎など)の庄屋などを勤めた玉島米屋三宅家に伝わる資料です。この日記は幕末に庄屋を勤め、藪内流茶道を嗜み絵画にも通じるなど、文化人としても知られる三宅安八郎(号・対鷗)の日記です。この資料からは地震の際家族が家を出て船に避難したことや地鳴り・海鳴りがしたこと、11月4日以降も断続的に翌年2月8日まで余震が続いたことなどが分かります
3	「文談明暮晰」 (倉敷市所蔵大江三宅家文書)	大江村・連島村(倉敷市連島町連島など)の庄屋や年寄を勤めた大江三宅家に伝わった資料です。「文談明暮晰」は大江村・連島村の年寄を勤めた三宅恵左衛門明吉(1788～1861)が遺した日記で、地震による家屋の損害、地割れ、液状化現象、川の増水・逆流など被害の様子が細かに描写されています。またこの日記には同年の6月14日の夜に起こった伊賀上野地震、安政二年の江戸大地震の情報なども記録されています【参考文献:『連島町史』連島町誌編纂会、1956年】
4	「先考遺筆 二」(『岡山県史』第22巻備中家わけ史料所収秋岡家文書)	川入村(倉敷市川入)の秋岡素平が父・惣五郎(川入村名主)の遺した手録を明治10年に編集した史料です。嘉永3年の洪水や嘉永6年の大旱魃、ペリー来航、安政地震など興味深い記録があります。なかでも安政元年の地震の直後、惣五郎が倉敷から撫川・庭瀬を通行して岡山城下までを廻って見分した記録は大変貴重な記録です
5	「新板地震万歳」 (倉敷市所蔵尾崎家文書 17-28-29)	万歳は正月に家々を廻って祝言を述べ歌舞を披露する門付け芸の一つですが、「新板地震万歳」は新年の祝いではなく嘉永7年11月5日の地震の様子が歌われています。歌謡のため解釈が難しい部分もありますが、人々が海鳴りや津波に怯え逃げ惑う様子、泣き叫ぶ子供・建物の倒壊・避難場所での様子などが記され災害の情景が目につくようです。末尾には「世直し」の言葉も見られます。「世直し」「万歳楽」という言葉は地震や雷などの災いを除ける呪(まじな)いの言葉で、安政2年の江戸地震後に大流行した「鯰絵」にも「万歳楽」「世直し」の言葉が記されているものがあります。鯰絵は「地震は地中の鯰が動いて起こす災害である」という俗信に基づく、大鯰と地震を主題とした錦絵で、地震除けのお守りでもありました。「新板地震万歳」も金毘羅大権現・瑜加大権現・妙見などの神仏に救いを求め、万歳・世直しの言葉を発することで地震から逃れようとする歌であったのかもしれませんが
6	「草木日雨風万覚帳」 (倉敷市所蔵西原家文書1)	児島郡小川村の西原家に伝わった史料で、文化9年から明治17年までの日々の雨天・大風や災害、作物の豊作不作などの日記です。安政大地震のほか嘉永3年、明治17年の水害などの記録もあります。西原忠平が記録をはじめ養子の雄右衛門が引き継いだようです

※3・5・6は倉敷市所蔵史料

※このほかの市域に関わる安政地震の記述がある史料に

「御用記録」(岡山大学附属図書館蔵・荻野家文書)・「売用日記」(財竜王会館蔵・野崎家文書)などがある

史料2 「日記」(玉島米屋三宅正堂家文書 35-19-A-5) 表 2-2

- ・海辺の村・阿賀崎新田村(倉敷市玉島阿賀崎など)の被害状況
- ・地震の頻発・長引く余震。地鳴り・海鳴りの発生
- ・家船への避難

史料3 「文談明暮噺」(倉敷市所蔵大江三宅家文書) 表2-3

- ・干拓地連島一帯と福田新田(倉敷市北畝・東塚・中畝・南畝・松江)の被害状況。
- ・連島一帯で甚だしい地割れ・液状化、破堤、河川の逆流の様子など
- ・福田新田で地下水の吹出による川水の逆流・液状化

史料4 「先考遺筆 二」(『岡山県史』第 22 卷備中家わけ史料所収秋岡家文書)表2-4

- ・現倉敷市域(岡山市域も)の村々の被害状況を記す
 - 大内村(倉敷市大内)…地割れ・青泥の吹出し(液状化)・地すべり・地盤沈下
 - 四十瀬新田村(倉敷市富井)…家屋の激しい傷み・地盤沈下
 - 水江村(倉敷市水江)…地割れ
 - 中島新田(倉敷市中島)…地割れ
 - 浜村(倉敷市浜町・浜ノ茶屋ほか)…青泥吹出し(液状化)
 - 子位庄(倉敷市祐安・青江・宮前・西岡など)
 - 浅原・西坂・生坂(いずれも倉敷市の大字)など山寄りの村…家・壁などに被害なし
- ・11月 25 日に大きな地鳴り(海鳴り)

史料5 「新板地震万歳」(倉敷市所蔵尾崎家文書17-28-29)表2-5

- ・児島辺り?の被害状況。建物の倒壊、津波、船・河原・竹藪への避難など

史料6 「草木日雨風万覚帳」(倉敷市所蔵西原家文書 1) 表2-6

- ・地震発生の記録のみ

☆被害状況まとめ

- ①地震の揺れの大きさ・頻発・長引く余震 ☞ 意識文下線④部分
- ②地割れ、地すべり、液状化、地盤沈下、川の増水・逆流 ☞ 意識文下線⑤部分
- ③家屋や堤防などの損壊 ☞ 意識文下線③部分
- ④海鳴り・地鳴りと津波 ☞ 意識文下線_____部分

(2) 地震の記録と情報収集

- ・庄屋たちが村を巡回し状況を把握し記録 ☞ 史料3・4
- ・他地域の地震の情報を入手し記録 ☞ 史料3・4・意識文史料7

3 倉敷代官所・庄屋・寺院の対応

- (1) 倉敷代官所の対応……「御用留」(九州大学所蔵守屋家文書 133)
 - ・年貢石代銀の引き下げ
 - ・地震による損害箇所の調査
- (2) 天城村名主の救恤……「覚帳」(倉敷市所蔵中島家文書 13-24)

有城村名主中島常太郎が※安政の札潰れと大地震によって困窮している百姓たちに米を配給。43 軒に白米 1 石 3 斗 1 升・荒米 2 石 9 斗 4 升を配布

※安政の札潰れ…岡山藩が行った10分の1幣価の切り替え措置。幕末厳しい財政難に陥った岡山藩は従来の 10 匁札を新銀札 1 匁札と切替える「札潰れ」を強行。11 月 5 日昼に銀札改正の布達をだしたが、その 4 時間後安政地震が起こった。藩の政策に反発した民衆らは暴動を起こしかけていたが大地震により回避された
- (3) 藤戸寺で地震鎮護の祈祷……「地震鎮護解願法楽大般若会雑記」(藤戸寺文書 95)

藤戸寺では 11 月 18 日、大般若経の祈祷をして祈祷札を配布

4 留意事項 ～古文書からの警告～

(1) 液状化と地盤沈下

- ・過去の史料から倉敷市域での被害は圧倒的に液状化や地盤沈下であるとわかる
- ・昭和 21 年 12 月 21 日午前 4 時 19 分に発生した昭和南海地震でも県下では著しい液状化・地盤沈下の被害が出ている
- ・液状化の起こる要因
 - ①干拓地・埋立地または河川沿いの沖積層などの地盤が柔らかい土地
 - ②地下水位が高い場所

※岡山県南部の平野ほぼ全域は河川による沖積層と干拓地・埋立地で形成されており液状化の危険性が極めて高い。

(2) 液状化の危険度

- ・平成 25 年岡山県公表の「南海トラフ巨大地震被害想定」では県南の低地・埋立地・干拓地および三大河川流域で震度5強から6弱

※震度6程度では家屋の倒壊はないが、岡山県南部に著しい建物被害をもたらす要因は地震動による土地の液状化であり、それに長時間の揺れが加わると建物が倒壊する。

※昭和南海地震発生後も児島湾沿岸、高梁川流域、笠岡湾沿岸で埋め立てや干拓事業が継続され瀬戸内海沿岸各地に埋立地が拡大。農業用干拓地・塩田跡が宅地に転用され市街化が進む

⇒液状化危険地帯が拡大 △

おわりに

☆将来南海トラフ地震発生の可能性(地震調査研究推進本部地震調査委員会公表)

- ・地震の規模 …M8～9クラス
- ・発生確率…… 30年以内に70～80%
20年以内に60%程度 (2023年1月1日時点の評価)

☆被害想定(内閣府報告の最悪ケース)

冬の深夜に東海地方を中心に大きく被災するケースで

死者 32 万 3000 人(東日本大震災の約 17 倍)

※ただし、建物の耐震化、家具の補強、避難意識の向上などにより 4 万 6000 人まで減少できると試算

表 3 南海トラフの被害想定と東日本大震災との比較

	M	浸水面積	人的被害	建物被害 全壊棟数	経済損失
東北地方太平洋沖地震	9.0	561m ²	1万8800人	13万4000棟	16～25兆円
南海トラフ巨大地震	9.1	1015m ²	32万3000人	238万000棟	215兆円
倍率		1.8倍	17倍	18倍	10倍

※表は加納靖之・杉森玲子・榎原雅治・佐竹健治『歴史の中の地震・噴火 過去が示す未来』118頁より転載した。数値は内閣府防災ホームページ(参考文献参照)の「南海トラフ巨大地震の被害想定について」(第一次報告書)のものである

☆過去の史料に学び災害に備えての対策が肝要

参考文献等

- ・『新修倉敷市史』3 近世(上)(倉敷市 2000)、『新修倉敷市史』4 近世(下)(倉敷市 2003)
- ・『真備町史』(真備町 1979)
- ・『改訂邑久郡誌』下 (邑久郡史刊行会 1954)
- ・『岡山県南部における南海地震の記録-昭和南海地震・安政南海地震-』(岡山県備前県民局 2007)
- ・『第5次地震防災緊急事業五箇年計画(平成28年度～令和2年度)』(岡山県 2021)
- ・地震調査研究推進本部事務局(文部科学省研究開発局地震・防災研究課)<https://jishin.go.jp>
- ・気象庁ホームページ <https://www.jma.go.jp>
- ・内閣防災情報のページ <https://www.bousai.go.jp>
- ・加納靖之・杉森玲子・榎原雅治・佐竹健治『歴史の中の地震・噴火 過去が示す未来』(東京大学出版会 2021)
- ・『総合調査研究小田川下流域誌』I 自然篇 (岡山県立矢掛高等学校生徒会 1956)
- ・「文献史料からみた東海・南海巨大地震」『地学雑誌』108 卷(4) (公益社団法人東京地学協会 1999)
- ・須貝俊彦・本多啓太「東日本大震災および既往地震による液状化と沖積層分布」『地学雑誌』124 卷(2) (公益社団法人東京地学協会 2015)
- ・渡辺尚志『江戸時代の災害記録に見る「村の力」日本人は災害からどう復興したか』(農文協 2013)
- ・『1707 宝永地震報告書』(内閣府(防災担当) 2014)

史料1 「嘉永七年甲寅正月吉日 御用書類留」(大橋紀寛家文書Ⅱ-1-A-12)

[意識]

11月5日の晩七ツ半(午後5時頃)に大地震があった。ただし、①この辺りでは前代未聞の大地震で大変驚き、町内一同仮小屋に移ったり、また野宿をしたりするなどして夜を明かした。しかし、当村では潰れた家はなく、人牛馬とも怪我は一切なかった。以上は大変な出来事なので、ここに記しておく。

月番 光右衛門

史料2 [日記](玉島米屋三宅家文書35-19-A-5)

[意識]

11月4日 快晴 朝五ツ半時(午前9時頃) ①大地震が起こり揺れた。

同5日 晩七ツ半時(午後5時頃) ①大地震が起こり家々[]が大きく小さく揺れ、明け方まで同様に揺れ続け女子供は西国屋の家船に避難した。

同6日 快晴 早朝から少々地震があった(中略)家内の者は一緒に船に乗って地震を避けたが私は家に残っていた。

同7日 曇天 四ツ時(午前10時頃)大地震があった。少々続けて揺れた(中略)昼後、大地震が起こり夜になってまたまた八ツ時・七ツ時(午前2時頃・午前4時頃)と両度大地震があり朝までたびたび揺れた。女子供は晩から船に乗り、私は家にいた。
(中略。この間毎日のように地震の記録あり)

同16日 曇天 昼九ツ時(午前12時頃)から大雪になった。夜五ツ時(午後8時頃)またまた地震が起こった。同四ツ時(午後10時頃)に海鳴りの音がして九ツ時(午前0時頃)には大風・大雪となった。これは近来まれなことである。

同25日 曇天 風有り。朝より雷鳴・地鳴りがした。
(後略)

史料3 「寅十二月改元安政元嘉永七寅歳 文談明暮晰」(倉敷市所蔵大江三宅家文書)

[意識]

一 11月4日五ツ時下り(午前9時頃)、①数十年以来なかった長い地震が起こり同日夜も2、3度少々ずつ地震があった。
(中略)

一 同日(11月5日)晩七ツ時下り(午後5時頃)に①大地震があり、その長いことは昨日の朝の倍であった。②村内庇などが落ち、ねり塀は崩れ、土蔵の壁が割れた場所が諸所にある。しかし恵左衛門宅(自宅)などはそれ程でもないと思っていたところ、大江前の野辺など五反地通りはもちろん、古屋地通り、中須賀横土手通りは一円田畑の③地面が割れ裂け、黒泥を吹出したところに穴ができ、そこから水や黒土を1、2尺(約30~60センチメートル)も吹き上げ、五反地辺は畑面が田のようになったと言って来たので大いに驚き、すぐさま前記の場所などへこわごわ駆けつけ見廻ったところ、麦畑が水にうずまった場所が数多あり、表堤茂浦山川など、④そうじて5、7間(約9~13メートル)、あるいは10間(約18メートル)位割れ、地神塚より下の大川表砂場のところは一円に水びたしになり、にわかに大川の水は1尺ばかりも増していた。暮になったので帰宅したが①始終地震があり、夜にはまた2度大きく揺れた。(中略)それから夜中数十度揺れ、6日の朝まで少々の揺れはたびたびであ

った。本家の六郎右衛門宅などは、③・4日の間に200回あまりも揺れたというが、恵左衛門宅(自宅)ではそれ程でもなかった。誠に前代未聞の恐ろしい事である。追々承れば、福田新田(現倉敷市北畝・東塚・中畝・南畝・松江)などは言うまでもなく⑥堤が裂け地面より水が出て三間川を上へ水が流れたので③多田屋開堤が破損したなどと伝えて来たが、これはすべて⑥吹出しの地水でこのような状況になったのである。③亀島新水門上手堤が割れ、鶴新田水門も破損したとのことだが、大したことはなく、まず連島内は家・土蔵などの損害は外の村々よりはまれなことに無難であった。あちこち大変な状況であるとのことで、上方大坂などは当地より1、2日も早く地震が起り、大坂市中は3分1も住居が崩れたとの風聞であるが、いまだ確かな情報は得られていない。

(後略)

史料4『先考遺筆 二』(『岡山県史』第22巻 備中家わけ史料掲載)

(前略)

- 一 嘉永7年11月4日、朝五ツ(8時頃)過ぎ頃③大地震があった。5日の晩七ツ半(午後5時頃)頃、③格別に大きな地震があり、その時の被害は甚だ大きいものであった。同日夜8時頃また大地震があり、その間には小さな地震が数知れないほど起こった。5日七ツ半の大地震から翌6日の明け方までにおよそ35~36回、間には小さなものも含めて50~60回も揺れた、などという。6日・7日も同様であった。もっとも次第に揺れは小さくはなっていく。平場の村々では3、4日ほど、夜外庭に小屋掛けをして昼夜住居したが、中には14、15日も外で生活した者もある。後には昼夜に5度、7度、11月末から12月になると2日に1度、また3日に1度、また、1日に2、3度もある時もあり、12月30日に1度、翌卯(安政2年)正月朔日に1度、5日に昼夜3度、12日の夜大きなのが1度、小さいのが2度、18日夜は大小ふたつ位であった。③何分にも長びく地震で、前代未聞である。5日の大地震による近辺の被害は以下の通りである。

川入では母屋と長屋が近接して建っている家は、地震の時約1尺5寸(約45.5cm)ほどずつ隙間が空いた。③瓦葺きで上が重い家は1尺5寸~2尺(約45.5~60cm)も傾いたようである。家々の壁は割れ、中には落ちた家もある。庇なども壊れ、落ちた家もある。大内村の東部は北から南へむけて大損害。③家々の庇が落ち、ねじれ、⑥地面が割れて5寸(約15cm)位口を開け青い泥を噴出している所もある。また田地を2、3尺(約60~90cm)も押し出し、まっすぐな畑が大きくゆがんだ所もある。あるいは1間~2間四方位(約3.2~13㎡)の地面が地下へずり落ちた所があり、その土はどこへ行ったのだろうか、不思議千万である。また、川入村の下の方、四十瀬新田辺りでは③家の傷みが激しく、中には4、5寸(約12~15cm)から一尺(約30cm)位も地中へずり落ちた所もある。

- 一 水江村に繰り綿商の船積み所があり、川原へ出したたくさんの俵を重ねて置いた所が地震で崩れ、⑥そこは砂場なので大きく割れて、その割れ目へ1俵転び込みその上へ砂がかかったので、その場に居合わせた者が綿主へ知らせたところ、綿主が急いでやってきて見れば、その1俵は消えていて、どういふ事かと怪しんでいると、そこに高瀬舟が居合わせ「間違いなくその割れ目へ落ちた。掘ってみよ」というので掘ってみると、砂に埋もれていた。けしからぬことである。

一 中島新田では㊦底などが落ち急いで家の外へ出たが、㊦地面が割れてとても危険なので歩行の時に板、または梯子に乗っているとのこと。㊦立ってはいられないほどである。

(中略)

一 浜村のうち中樋ノ東では㊦田の中に青土を噴出しているの見物に行ったところ、所々に穴が空いて噴出している。吹き出す時はおよそ2、3尺(約 60~90 cm)も吹き上げその穴へ3間(約 5.4m)位の棒は簡単に入った。

(中略)

一 山寄りの村々は損害が少なく、子位庄・浅原・西坂・生坂辺は家・壁などに被害はない。

(中略)

一 5日の地震の時、往来のために歩こうとした者たちはみな、㊦全く歩くことができず眩暈がするようで足が立たなかった。

一 自宅にいた者も残らず逃げ出したが、婦人・子供は立って逃げることができず、みな屈んでいた。

一 大地震の後、11月25日、朝から八ツ頃(午後3時頃)まで大きな音が響き渡り、10数度鳴り渡った。その音はこの辺ばかりではなく、追々聞けば上、下は申すに及ばず、松山の奥辺りも同様に響いたとのことである。その時は、どんな変事が起こるのかとみんな心配していたが、後から聞けば海鳴りであったとの事。(全国の)所々で津波があったとの事で、この津波で大坂・伊勢その他海岸は大損害との事。児島郡で12月から1丈5、6寸(約 3.15m~3.18m)くらいの高さの波が来たと後日聞いた。

(中略)

一 地震も揺れる時は大きな音がするものである。

(中略)

一 ㊦備中内では安政2年2月頃までは2、3日おきに、また小さな揺れは毎日あった。3月になっても時々揺れた。

(後略)

史料5 「新板地震万歳」(倉敷市所蔵尾崎家文書17-28-29)

[意訳] ※合は合いの手

嘉永7年寅の年、11月5日の晩方、海鳴りがして大地震が起こった。これはどうしよう、腰が立たない。足元に水が逆巻き、津波も打寄せて誠に心配なことでございます。合 南無金毘羅大権現・南無瑜加大権現、お助け下され。それ、又来た。早く、早く、早く。背負った子供は言う事を聞かず、下せば泣き叫ぶ。合 やれ、この子をどうしよう。火の元大事。俺は平地へ、妻は船へと。合 散り散りに別れて行った。㊦よろよろ、めきめき裏屋根の落ちる音がして。合 人々はびっくり。店も土蔵もいっぺんにバタバタ砕けて割れて。合 「お天道様どうかお助け下さい」「妙見様」と、あちこち向いて(人々が)祈っている様子は誠に憐れでございます。合 揺れこんだらどうしよう、どうしよう、どうしよう。(海鳴りが)どろどろと鳴ってきた。広小路へ行きなさい、西の田んぼへ走りなさい、みんな河原に逃げていきなさい。逃げていきなさい、逃げていきなさい。どうしよう、どうしよう。藪の中へ入りなさい。逃げている者は大勢、小勢。後家も娘も、なりも恥も。さまうりこ、さまうりこ、さまうり、さまうり(この部分意味不詳)。広い場所へべったりと持っているゴザをひろげて、そこらの子供は傍の方へ寄り合って騒がしくする。皆さんごめんなさい。お爺さ

ん、お婆さん、横になりなさい。(中略)皆霜に打たれ通し(で寒いので)色々結構に(避難)小家を建てているが、後には裕や夜着を持ってきて、炬燵を据えるやら飯を炊くやら、飲み食いするありさまは実に貧しい者たちの浮ついた行動と見える。次第に地震も鎮まり、ゆっくりと収まった。それではお暇しようか。この上また揺れ出したら又ここに来ましょう。みんなそれぞれわが家に帰り、安心しなさい。地震が収まっているうちに門を開け、家の内では座が落ちているが、そっちもこっちも世直しの御酒を一献傾けて、喜び申しましょう。

史料6 「草木日雨風万覚帳」(倉敷市所蔵西原家文書 1)

△11月5日晚七つ時より大地震。夜、6日も同様。7日大地震。

史料7 「雑記録」(倉敷市所蔵繁屋中原家文書 8-10)

備中船尾村の庄屋小野岡次郎が関船で出府した際、10月29日江戸を出立。帰路薩田峠^{さつたどげ}(静岡県静岡市。由比宿と興津宿の間)で大地震・津浪に遭った話を直に聞いた。

茶店で小休憩し不二(富士)山を遠望していたところ、地震が起こり茶店を早々に出て、その辺を見回したところ、山手の大松の枝が箒を振るように揺れていたため、あの松に取り付けば安全であろうと山に登りかけた。すると山の上から大きな石が落ちて来たので避けたが、また落ちて来て左腰の大刀の鞘に当たりそのまま道に倒れてしまった。このまま運を天に任せようと思っていると少し揺れが収まったので、先ほど休憩した茶店へ戻ると店は倒れ、その辺にあった石灯籠が倒れて3、4歳の子供が圧死しており、腸わたがでていた。あちこち見廻ったところ、黒い煙が立っていた。同伴の者たちも無事で、道連れになった長州家中の千本という人も無事だった。互いに案じていたが無事であったことを喜びあった。

興津川という所で駄荷も駕籠も打ち捨て人馬とも行方知れずになり呆然としていたところ、山上から「津波だ」と大声がしたので高い方へ逃げたためこれも凌ぐことができた。実に地獄に落ちた心地である。あれこれ話し合っていたところ空腹になったので、そのあたりの村役人へ掛け合い白米三升用意し鍋を借り受けて川原で炊いた。ここでまず飢えを凌いだ。そうこうするうちに七時半時になり長州武士はここに滞在するといふので、一歩でも西の方に進む方が良いと言ったところ、同伴の者たちもみな応じたので、駄荷駕籠面々興津宿手前の村方へ持って行き村役人に願い置き、興津宿の間屋まで行ったところ、膝の下まで泥だらけでどぶの中を歩いたようであった。問屋も本陣も一人として人がいなかった。やむを得ず前の村まで戻ると大工の権七という者でいたって良い人物が厚く世話してくれ、筵などを貸してくれたので野宿したが、夜通し地震はやまず一睡もできなかった。荷物は家来を添えて村役人に願い置き、翌日袖に握り飯を入れて西に向かって歩いた。興津宿から(揺れが)甚だしく、4泊の間一睡もしなかったとのことである。焼死者・圧死者の死骸はそれぞれ居宅で火葬し、目も当てられないことだ。火事後の臭気と火葬臭気が甚だしいので困ったとのこと。ようやく15日に無事京都まで着き、同所に2日滞留し、昨夜船尾に到着し話していたので、これを書き留めておく。